

縄文詩劇

『ママチ川』

原子 修

闇

稲妻

雷鳴

雨ふりはじめる

風つよまる

荒れ狂う嵐

やがて 沈黙

水の滴のしたたり落ちる音 虚空にエコー

かすかな瀬々らぎ

川の流れ しだいにつよまる

光 青白くさしのぼる

はげしい川の流れの音

突然 沈黙

川の神ママチ

「(声は男 立ちこめる煙りの中から現れ)オオオオオオオオオオオオ

ー (ファルセットで)」

エメラルドの光

川の神ママチ

「はじめに わたしが あった 極北の天にはためく 七いろのカ

ーテンを オーロラと名づける 虹いろのわたしが あった 雪の

いてついた牙を むきだして 襲ってくる 世界のはてを ふぶき

とよぶ まっしろいわたしが あった」

グレーの光と音楽

狼ホルケー あえぎあえぎ旋舞

川の神ママチ

「なぜか いっぱきの狼が 北の空の高みを はしっていた

汗のしずくをふりこぼし 息も絶え絶えに はしっていた」

空がオーロラにそまる

大白鳥ペケーレ

「(狼ホルケーの方に手をのべ 女の声で絶叫し)やめて ホルケー

あなたの 銀いろの毛が 一本のこらず抜け落ちてしまわないうち

に わたしのひろげた翼の中に おりてきて」

川の神ママチ

「大白鳥は 狼を愛していた しかし 彼は 耳をかきなかった

なぜか 涙を 星のしずくのようにふりこぼし 空のへりを 悲し

みの冠のように めぐっていた」

大白鳥ペケーレ

「(絶叫し)牙が ぐだけて 水晶のかげらのように 落ちてくるわ

爪が ぬけて 氷の針のように 降ってくるわ やめて ホルケ

ー」

狼ホルケー しだいに力を失い 倒れ伏す

大白鳥ペケーレ

「(狼ホルケーを抱きしめ 泣く) あああああ」

川の神ママチ

「ついに 大白鳥が 翼に 抱きしめることができたのは 力つきて息絶えた 狼のむくろであった」

甲高い急迫の音楽

青白い光

流水アプー

「(大白鳥の背後から 爪をかざして にじり寄り) いっひっひっひっひっひ そうはさせないよ」

川の神ママチ

「(急迫して) かねてから 狼ホルケーに 想いをよせていた 流水アプーが 大白鳥に襲いかかった……狼のむくろを奪いとうろとして」

大白鳥ペケーレ

「いやよ けっして渡さないわ」

危機の音楽

旋回する光

川の神ママチ

「しかし 狼のむくろを抱いたままの大白鳥は 飛びたつことができなかった みるみる 流水アプーの 鋭い爪が 迫ってきた」

急変する光と音楽

はげしい羽音

空へと舞い上がっていく大白鳥ペケーレの映像

川の神ママチ

「ついに 狼ホルケーのむくろと一体化することに成功した大白鳥が 危ふく 虚空へとのがれ得たかにみえたとき もっとおそろし

いものたちが ゆくてに待ちかまえていた

それは 昼のトカップと 夜のクンネだった」

光と闇のはげしい明滅

昼のトカップ

「(スローモーションで逃げのびようとする大白鳥に追いつき 男の声で) えっへっへっへっへっ 雲よりもやわらかい この鳥はおれがいたたくとしよう」

夜のクンネ

「(スローモーションで逃げのびようとする大白鳥に追いつき 女の声で) 風よりもさわやかな この鳥は あたいのものさ」

川の神ママチ

「はげしく争う 昼と夜が むごたらしく 噛みあい むさぼりあって ついに 半身が男で半身が女のおそろしい怪物トオになったとき この世のはてを思わせる巨大な口がひらかれ トオは一気に 大白鳥をのみほしてしまった」

のみほす音

闇

落ちていく音

闇の中心から はじめは点 しだいに 回転していく 氷の 青白い

光

川の神ママチ

「世界のいちにちを支配する怪物トオの咽喉は 底なしの 巨大な暗黒だった どこまでも どこまでも落ちていく大白鳥は まっくらなスピードの手でつよく圧縮され みるみる ひと粒の水にかわっていった」

しだいに大きく成長する氷の 青白い光

川の神ママチ

「闇が増すほど 氷は固くなった 寒さがつのるほど 氷はすきと

おった

そして ついに 闇と寒さが極限に達したとき 氷の中心に一滴の火が ともった」

ふるえ鳴る鈴

氷の中心にともる火

かすかな曙光の音楽

みるみる燃えさかる火

くだけ散る氷のかげらと音

さらに大きくふるえ鳴る鈴

太陽が空に照り輝く

きらびやかな音楽

パツと闇

沈黙

スポットライトにうかびあがる性別不明のヒト

川の神ママチ

「氷の中心にともった火が ついに 氷をうちくだいて 空に輝く

太陽となつたとき ハスカップの花が……ナナカマドの木が……ア

メマスが……エゾアカシカが……そして ついに ヒトが 地上に

姿をあらわしたのだ——燃えさかる太陽を心臓とする むすうのい

のちが」

スポットライト消える

ヒト 消える

水の滴のしたり落ちる音（エコー）

かすかな瀬々らぎ

川の流れ しだいにつよまる

光 青白くさしのぼる

川の神ママチ

「わたしは 川の神ママチ もう何万年も すきとおって つめた

い 水の肉体に 銀いろのヤマベを べっこういろのカワエビを 緑いろのバイカモを そして 宝石のようにきらめく神話を やし

ない育ててきた わたしは ママチ川

流れていく 流れていく 流れていく わたしは ママチ川 過去

がけんめいに暗算する未来へと 流れていく ママチ川 未来が一

心不亂に逆算する過去へと 流れていく ママチ川 太陽から流れ

でる 血のいろの光を すきとおった現在にかえて いつまでも

いつまでも いつまでも 流れていく ママチ川

オオオオオオオオオ（ファルセットで）

パツと 縄文風の光 全開

呪術的な音楽

ゆつくり旋回する川の神ママチ

背をむけた瞬間 川の神ママチは 立ちこめる煙の中で素面巫女ツス

クルに早変わり

素面巫女ツス

「（縄文巫女スタイルで）ヒエーツ（ファルセットで叫び声を連発し

ながら踊る）」

音楽とステージアート高揚

仮面巫女群 縄文巫女スタイルで クマ笹をうちふり 素面巫女ツス

クルを中心に 踊り狂う

踊りの環の中心に燃えさかる火

呪術的なステージアート

太鼓のリズム

それに合わせて

単唱者（男）の朗唱の声

「血まみれの舌で

太陽がうたう
流れていくよ流れていくよ流れていくよ

イワナのオパール

アメマスのエメラルド

カワガニのアメジスト

タニシのペリドット

流れていくよ流れていくよ流れていくよ

カワウソのトパーズ

キタキツネのブラッドストーン

ヤチブキの黄金

わたしの魂

しなやかな水の記憶が

はしりすぎていくよ

うつくしい蛇が

くねっていくよ

渦巻け渦巻け渦巻け

火

時間

森

光の顎が闇の尻尾に闇の顎が光の尻尾に

噛みついて

生と死が

はじまりもおわりもない

液体のヒモの環に

むすばれていく

流れよ流れよ流れよ

ママチ川

渦巻け渦巻け渦巻け

えいえん」

闇

沈黙

現代風な音楽（シンセサイザー 喜劇的に）

ステージアート（現代的に）

川の瀬々らぎ

素面の女マ― 自転車に乗ってよろめきでる かぶった帽子に固定された逆開のパラソル ロングヘアーを抑えるイヤホーン イヤホーンから突きでたパラボラアンテナ型の花 大きな水中メガネ その中で泳ぐ金魚 浜薔薇の花の大きなスピーカー状の唇 両の胸でゆれる二個のゴム風船の乳房 とりどりのボタンをつらねた首飾り ゴム袋でふくれあがった腰 チェーンのベルト 手首には物干しのクリップをつらねた腕輪 背には物干し器にハンカチやパンティやストッキングやブラジャーをはためかし 足には大きなメロディーサンダル 空カシやタバコの空箱や色とりどりの包装紙やドアベルなどを満艦飾につけた自転車

突然上空から急降下するジェット戦闘機の爆音

けたたましいブレイキの音

素面の女マ―

「（自転車にまたがったまま とまり 浜薔薇の花の唇をさつと闇に投げ 空にむかつてどなる）うるさい ジェット機ヤロー（自転車から降り ヒステリックに）へん なにーが 浜薔薇の赤き情熱の唇だよ（甲高く笑って）オーホホホホ ここーが シーコットの空港の首にニョーロニョーロからーむ ママチ川か ふん（自転車を闇に向け）さらーばじゃ かわゆーい金属のヨットちゃん はん どーせ ゴミー捨てー場でひろーった自転車じゃとつとと とつとと 銀蠅蛆虫フトミミーズニョロニョロニョロニョロの海で 難破しちゃうえー（自転車を闇に投げ くるりと向き直って 空を見上げ 両手を空にひろげ 甲高く笑って）アーハハハハハ（頭から 逆開のパラソル帽をとり）宇宙から脳天大神の光

のニュースしやわしやわしのびつしよびしよ（突然深刻そうに）でも もう手遅れだわ（それを闇にすてる）」

音楽 さらに喜劇的に転換

素面の女マ

「（メロディーサンダルを踏み鳴らしながら 腰を大きく振って一巡し 甲高く笑って）イーヒヒヒヒヒ（背中の中物干し器を外し）ハンカーチの帆 パンティーの風 ストッキングの櫂 ブラジャーの梶 太陽から吹いてくる金いろの砂漠（物干器を闇にすてながら）もー すつかーり かわーいて 宇宙は とつこーに乾燥期のかつさかさ ひつりひり ごつわごわ（甲高く笑って）エーへへへ（首飾りをはずし）やつぱーり 身軽 足軽 見違へる（首飾りをふりかざし）道端に落ちていた シャツツのボタン ステテコボタン ワンピース ツーピース ブローズのボタン 海の渚でひろった 貝の殻（首飾りを闇にすて 甲高く笑って）イーヒヒヒヒヒ（腰のベルトを外して ふりかざし）都会の歯車まわーしていた チェーンの切れつぱーし 沈む文明のこーしていった錨の鎖（闇に投げ）（腕輪を外してふりかざし）人類の運命を物干竿にとめていた破壊のクリップ（闇に投げ 甲高く笑って）オーホホホホ（メロディーサンダルを踏み鳴らして一巡し）（大きな水中メガネに両手をあてがい）見えーてくる見えーてくる見えーてくる 時間のむこーがわ ママーチ川の流れ わたーしのはじーまり（水中メガネを外してかざし）風景の川底に 沈ーんでしまえ 金魚のわたーし（水中メガネを闇に投げ 甲高く笑って）アーハハハハ（イヤホーンに両手をあてがい）きこーえてくるきこーえてくるきこーえてくる 世界のみじろーぎ だれーかの鼓動（イヤホーンを外してかざし）わたーしの 耳の パラーポラアンテナーに きこーえてくるきこーえてくるきこーえてくる だれーかの瀬々ーらぎ だれーかの渦潮 だれーかの いのーちの な

がーれ（イヤホーンを闇にすてる）」

悲劇調に急変するステージアクトと音楽

素面の女マ

「（メロディーサンダルをぬぎすてて はしり狂い とまって）だれなの だれなの だれなの（腰のゴム袋をさすり）水でいっぱいいのちの袋の 底なしの底の方から わたしを呼んでいるのはいつたい だれなの（ゴム袋を外して闇にすて）ああああああ（胸の二つのゴム風船の乳房をさすり）水の泡の中に なにか 初雪の匂いのする風が みちみちてくる（ゴム風船を宙にはなち ほとんど裸身で立ちすくみ）ああああああ」

完全に悲劇調の音楽とステージアクト

しだいにスポットライトの中に入っていく素面の女マ

沈黙

遠くからかすかに赤ん坊の泣き声（エコーで） やがて しだいに高くなる

素面の女マ

「（絶叫し）あああああ（髪をふり乱して悶えあの夜 とつぜん マチ川の暗闇から あらあらしい男たちの影がおどりで わたしにつかみかかった 悲鳴をあげようとするわたしの口を ひとりの男の手がふさぎ べつの男が わたしを草むらに押し倒し かわるがわる わたしをレイプして また マチ川の暗闇に消えていったそして そして（忍び泣く）けがわらしくも わたしは みごもった

（絶叫し）あああああ

だれのともわからない この子を やつぱり わたしは うまなければならないの？

いやいやいやいや（泣き叫ぶ）」

単唱者（ソプラノ）の歌

「芽ぶいてくる

不当な

あけぼの

ふきこぼれてくる

光の

けがれ

いのちの地平線に

血まみれの

太陽が

昇る」

素面の女マ―

「ああああああ（泣き伏す）」

沈黙

土面女シーの声（エコーで）

「（はじめは低く　だんだん高く）おいで　おいで　おいで」

素面の女マ―

「（声の方に身をおこし）だれ　だれなの」

土面の女シーの声（エコーで）

「おいで　おいで　おいで　マ―」

素面の女マ―

「（じよじよに立ち上がり　声の方へと両手をのべて　片足ずつ

しずかに進み）だれ　いったい　だれなの」

土面の女シーの声（エコーで）

「あなたが　いま　うみだそうとしている　数千年前の　赤ん坊の

ところに　さあ　おいで」

素面の女マ―

「（すつくと立ち上がり　狂乱のあまり　川岸に走りより）わたし
死ぬわ　この川に　身を投げて　わたし　死ぬわ（身をなげようと

する）」

ピエーツと鋭く鳴る縄文笛

だんだん高鳴る口琴

ねじれ鳴る縄文音楽

青白いステージアート

投身しようとする素面の女マ―を抑えるようにして

ママチ川が　いち枚の鏡となつて立ち上がる

川の神ママチ

「（立ちこめる煙りの中からあらわれ　ファルセットで）オオオオオ

オオオ―ツ

女マ―よ　ママチ川は　いま　いち枚の鏡となつて　立ち上がった

みよ　水面に　うつた　おまえの中のもう一人のおまえの顔を

（たちこめる煙の中に消える）」

鏡に　ポ―ツと　ママチ土面が　浮かびあがる

素面の女マ―

「これが　わたし？　わたしの顔？」

土面の女シーの声（エコーで）

「そうよ　そして　あなたをうんだおかあさんの　赤ん坊のときの

顔よ」

素面の女マ―

「おかあさんの？」

土面の女シーの声（エコーで）

「そして　あなたのおかあさんの　そのまたおかあさんの……何千

年とつづく　むすうのおかあさんの　赤ちゃんのときの　むすうの

顔よ」

素面の女マ―

「そして　やがて　わたしが　うみおとそうとしている　赤ちゃん
の顔？」

土面の女シーの声（エコーで）

「さあ おいで マー あなたを 未来にむかつて うみおとそう
とした 数千年むかしの あなたのもとに さあ おいで」

縄文の音楽わきおこる

縄文世界をえがきだすステージアート

鏡 消える

ママチ土面の映像 虚空に大きく浮かぶ

素面巫女ツスキル ヒエーッとファルセットを連発しながら ママチ

土面の映像への礼拝の踊り たちこめる煙

素面巫女ツスキル of 扉をひらく動きにこたえて ママチ土面 ゆるや

かに下降をはじめ ついに 素面巫女ツスキル of 手中に消える 素面

巫女ツスキル ママチ土面をかかげ ヒエーッとファルセットで叫び

声を連発しながら 踊る

音楽と光 高揚

仮面巫女群 クマ笹をうちふり 素面巫女を中心に 踊り狂う

踊りの環の中心に燃えさかる火

呪術的なステージアート

その中心にうかびあがる白蛇の映像

太鼓のリズム

それに合わせて

単唱者の朗唱

「朗唱につれて 白蛇の映像が ゆれ 多頭化し また 単頭に

なり ゆらぐといっしょに 白から赤へと色彩も多様に変化し 萌

えさかり また 白にかえる」

白い蛇 白い川 白い焰

宇宙が萌えるよ

白い指 白い血 白い光

川は

手足を切り落とされた

液体の蛇

だから

岸には

カワヤナギの踵をはやそう

ミズナラのふくらはぎをはやそう

ドロタモのひざがしらはやそう

ハルニレの腿をはやそう

だから

岸には

カエデの腕をはやそう

イチイの肘をはやそう

トドマツの手のひらをはやそう

エゾマツの指をはやそう

川よ

すきとおって冷たい母乳よ

母よ

母の母の母の母よ

そして同時に

父の父の父の父よ

よみがえれよみがえれよみがえれ

星座が燃える

蛇が燃える

赤ん坊が燃える

水が燃える

死者が生きかえる」

素面巫女ツスキル ヒエーッとファルセットを連発しながら 素面の
女マーに ママチ土面をさしだしてちかづき おそれて後ずさるマー

に ついに 土面を渡す

土面の女シーの声（エコーで）

「おいで おいで マー」

土面をつけたマー

「（踊りの環をぬけだし 声の方ににじり寄り）どこへ？」

土面の女シーの声（エコーで）

「あなたの いちばん 奥深い 内部へ」

烈しい音響

光の渦巻 たちこめる煙

土面をつけたマー 土面の女シー（土偶スタイル ママチ土面をつけている）に早変わり

土面の女シー クローズアップ

闇

うつくしい縄文の音楽

きらびやかな縄文のステージアート

逆光の中の素面の男ムー オタモイハープを弾奏
とつぜん 鳥のさわがしい鳴き声

土面の男ムー

「（土偶スタイル 縄文メーカーキャップ 弓で 頭上にまつわりつく

鳥を追いはらうしぐさをしながら）えーっ しっしっしっ おーっ

しっしっしっ パスカル・カムイ グアーワア ハシボソガラスの

神 グワアグワア いつも夜の黒い水で羽根をなでつけている お

まえは 妙なおしやれの神だけれども やっぱり 神は神 だから

おまえの赤ちゃんも 神 その神を わけもなくいじめたり さら

ったりするおいらとは けっしてけっして思ふなよ えーっ しっ

しっしっ おーっ しっしっしっ パスカル・カムイ カアカ

アー ハシボトガラスの神 カオー アーアーアー こんなにも

心をこめて つぶれた声の神 くちばしの醜い神のおまえを あが

めているのだから けっして けっして おいらの赤ちゃんが 空
からおりてくるのを待ち伏せて さらったりなんぞ するでないぞ
えーっ しっしっしっ おーっ しっしっしっ」

鳥の声 やむ

土面の男ムー

「（弓を肩にかけ）ほーっ やっと 頭の蔵にしまっておいた 大事
な大事な脳味噌 つまみ食いされずに すみしましたわいなあ」

土面の女シー

「（大きな壺を肩にかついで現われ）ムーよ わたしの大事な夫 身
重のわたしが まるで 刑罰にあった罪人のように苦しんでいると
いうのに あなたばかりは 鳥といっしょに 騒々しく遊びくらし
ているのねえ」

土面の男ムー

「（妻のもとに駆け寄り 壺を奪いとつて）ちがうよ シー おまえ
のお腹の子どもが 鳥の神々にさらわれて 空の彼方にいつてしま
わないように 弓でまじないをかけていたのさ」

土面の女シー

「（足もとをとられてよろけ ムーにすがりついて）あつ 畜生 じ
ゆくじゆく 水たまりが また わたしの よろけ足を すくつて
は けたけた笑っている」

土面の男ムー

「（シーを抱きとめ 明るく）このあたりが メム オト イ 湧き
水がよく溜まる場所 とよばれているのも 水の神が おれたち
やノウサギやエゾノカワヤナギに いのちの水を どっさり授けよ
うとしているからじゃあないか」

土面の女シー

「（ムーをみつめ）そうね 水の神に 感謝しなくっちゃあね」

土面の男ムー

「(シーのお腹をなで)そーら メムの水の神のおかげで お腹の赤ちゃんも 満月のように大きく育っている」

土面の女シ―

「ねえ お腹の赤ちゃん なにか言っていない？」

土面の男ム―

「(シーのお腹に耳をあて) うん 言っている 言っている」

土面の女シ―

「ほんと？」

土面の男ム―

「うまれたい うまれたい って 言っている 体ぜんたいを声にして 言っている」

土面の女シ―

「(ム―に抱きつき) はやく うみたいわ」

土面の男ム―

「(シーを抱きすくめ)おれたちのはじめての子を はやく うんで」

土面の女シ―

「(ム―から離れ)でも 初子は難産が多いというわ わたし 大丈夫かしら？」

土面の男ム―

「(壺をかつぎ)大丈夫 大丈夫 ここら中のメムの水をぜんぶ集めて流れる すきとおって冷たいママチ川の水を飲めば 無事に安産できるよ」

土面の女シ―

「(心細そうに)ム― あなた わたしの代わりに 水を汲んできてくれるの」

土面の男ム―

「さあ お腹の赤ちゃんといっしょに 小屋で待っておいで

おいしい水をどつきり汲んでくるかね」

土面の女シ―

「水を汲むのは 女の仕事なのに……でもありがとう あなたの言うとおりにするわ」

土面の男ム―

「(川に向かって歩きながら)クマ笹の茂みにひそむ罾に気をつけるんだよ」

土面の女シ―

「(小屋に向かって歩きながら)あなたも 石わらの蝮に噛まれないよにね(去る)」

土面の男ム―

「(立ちすくみ 耳をすまし)ほっ きこえる きこえる きこえる
母なる川 ママチ川の瀬々らぎ 父なる川 ママチ川の流れ (草
むら分けてすすみつつ 詩の朗唱 うたうように)」

光る蛇 光る川 光るわたし

銀河が燃えるよ

光る爪 光る目 光る心

川は

髪の毛を刈りとられた

液体の蛇

だから

水際には

まつしろいミズバシヨ―の花を咲かそう

薄紅いろのエゾネギの花を咲かそう

乳いろのイケマの花を咲かそう

鈴いろのオオアマドコロの花を咲かそう

ラッパいろのエゾウバユリの花を咲かそう

だから

水際には

雪いろのニリン草の花を咲かそう

夕暮れいろのスミレサイシンの花を咲かそう

曇いろのミズゼリの花を咲かそう

唇いろのウルイの花を咲かそう」

川の瀬々らぎの音たかまる

ファンタジックな川の音楽

土面の男ムー

「川だ 川だ ママチ川だ(水際に座って祈り)川の神ママチよ あなたの体にうつくしく瀬々らぐすきとおってつめたい水を どうかこの壺にいっぱい わけてください わたしと わたしの妻のシーとそして 彼女がうもうとしている赤ん坊のために どうかあなたの きよらかな血を この壺に いっぱい ゆずってください お礼に わたしも わたしの妻シーも やがてうまれてくる赤ん坊も 心から あなたを崇め あなたを尊とびますから どうかお願いいたします 川の神ママチよ」

霊妙な音おこる たちのぼる煙

川の神ママチ

「(ファルセットで)オオオオオオオオオオ」

けなげな男ムーよ この水は わたしの血そのもの 体そのもの 永遠そのもの 心して汲み 感謝して用いるがいい

(ファルセットで)オオオオオオオオオオ (煙の中に姿を消す)」

土面の男ムー

「(両手を合わせて感謝し) ありがとうございます 川の神ママチ (立ち上がり壺をとりあげ 水辺に降りて 水を汲み) ほーっ ツ エツエツエ ほーっ サリサリサリ 大地の神の口から流れでた つめたいつめたい水 ヤムワツカ サララ ヤムワツカ キララ ほーっ ツエツエツエ ほーっ サリサリサリ ママチの川の 蜜

の水 神の水 カムイワツカ サララ カムイワツカ キララ いのちの水の美しさ ピリカワツカ サララ ピリカワツカ キララ ほーっ ツエツエツエ ほーっ サリサリサリ (壺を肩にかつぎ 岸にのぼる)」

異変の音

沈黙

素面の男ムー 立ちすくむ

熊の吠え声

女の悲鳴

土面の男ムー

「(耳をそばたて) 笹やぶから躍りでた熊のキムンカムイだ 身重の妻が危ない (壺を置き肩の弓をはずして矢をつがえ 走る)」

熊の吠え声

女の悲鳴

闇

危急の音楽

ぱつとステージアート

土面の女シー

「(腹をおさえ ころげまわって苦しみ) ウーッ ウーッ ウーッ」

土面の男ムー

「(妻の背をしきりにさすり) もう大丈夫 熊のキムンカムイは マチの山の 彼じしんのくにに 逃げ帰ったぞ」

土面の女シー

「(なおも苦しみがき) ああ 苦しい ああ うみたくない ああ いたい ああ うみたくない」

土面の男ムー

「けものに襲われた恐怖で 突然 産気づいたのだ ああ アペ・フチ・カムイ 火のおばあさんの神よ 妻のシーの 出産の苦しみ

を たぎぎのようにたばねて わたしの肩に背負わしてくれ」

土面の女シー

「(腹を抑えたまま 立ち上がり) ああああああ(絶叫し ばった
り倒れ伏す)」

怪奇な音楽

明滅するステージアート

南島の女スーの声

「(重く加工されたエコーの声で) おいで おいで シー」

土面の女シー

「(重く加工されたエコーの声で) だれ だれなの」

南島の女スーの声

「(同じ声で) おいで おいで おいで シー」

土面の女シー

「(じょじょに立ち上がり 声の方へと両手をのべて 片足ずつ
しずかに進み) これは 夢……夢なのね でも いったい あなた
は だれ だれなの(重く加工されたエコーの声で)」

南島の女スーの声

「(同じ声で) あなたの夢の中にいる 何千年も前の もう一人のあ
なたよ」

土面の女シー

「(なおも進みつつ 同じ声で) じゃあ あなたが わたしの夢の中
に いる ずっとずっと昔の わたし?」

南島の女スーの声

「(同じ声で) そうよ だから シー あなたの 夢の中に さあ
おいで」

南島の音楽 けだるいシンセサイザーでおこる

南島世界をえがきだすステージアート

素面巫女ツスキル 仮面巫女群と共に 夢幻世界をシンボライズする

ボールをひるがえし ヒエーツとファルセットを連発しながら スロ
ーモーションで踊る 仮面巫女群 手に手にフェニックスの葉をうち
ふりながら 素面巫女ツスキルと共に スローモーションで 土面の
女シーをとりかこみ 踊る

高揚する南島の音楽

音楽にまじって ヤッ エッ オッ オホホホホホ アアアアア

アなど 様々な男女の声のテープから入り乱れる

やがて 巫女群の踊り ステージアートと共に 赤い渦となり 烈し
い旋回 たちこめる煙

土面の女シーの声

「(エコーで) これは 夢……夢なのね ああ 夢は 底なしの井戸
どこまで落ちていくの?」

土面の女シー 赤い渦にのみこまれて くるくる旋回し 南島の女ス
ーに早変わりして パツと 音楽と光 とまる

南島の女スー

「(素面 入墨 裸身に近い姿 ファルセットで) オホオホオホオホ
オホオホーツ」

素面巫女ツスキル ヒエーツとファルセットを連発しながら 南島の
女スーを 踊りに導びき入れる

仮面巫女群 フェニックスの葉をうちふりながら 踊りの環をつくる
高鳴るドラム

素面巫女ツスキルの狂舞に導びかれて 南島の女スー 妖しく踊りつ
つ 耳の穴から紅雀をとりだし 仮面巫女に渡す

歓声おこる

南島の男の声

「(エコーで) 耳の穴から 紅雀 虹の扇のように美しい紅雀」
南島の女スー 鼻の穴から白い犬をとりだして 仮面巫女に渡し

歓声

南島の男の声

「(同じ声で) 鼻の穴から 白い犬 空とぶ雲のように美しい犬」

南島の女スー 口から大きな鈴をとりだし ふり鳴らして 仮面巫女に渡す

歓声

南島の男の声

「(同じ声で) 口から 銀いろの鈴 光のしずくのように美しい鈴」

南島の女スー 目から山刀をとりだし 仮面巫女に渡す

歓声

南島の男の声

「(同じ声で) 目から 鋭い山刀 氷の刃の美しい山刀」

南島の女スー へそから斧をとりだし 仮面巫女に渡す

歓声

南島の男の声

「(同じ声で) へそから 重い斧 月の光で研がれた美しい斧」

南島の女スー ほとから弓をとりだし 仮面巫女に渡す

歓声

南島の男の声

「(同じ声で) ほとから しなやかな弓 ほとばしる瀧のように美しい弓」

い弓」

南島の女スー 肛門から矢をとりだし 仮面巫女に渡す

南島の男の声

「(同じ声で) 肛門から すべらかな矢 稲妻のように美しい矢」

突然 狂乱の音楽とステージアクト

南島の男の声

「(エコーで狂乱の叫び) この女は 俺たちのできないことをする
この女は 人間じゃあない この女は ねたましい この女は魔物
だ 殺せ 殺せ 殺せ」

仮面巫女群 ゆるやかに踊りながら 南島の女スーに弓で矢を射かけ

斧でうちすえ 山刀で 体をばらばらにし スローモーションで 体の部分部分を 種まくように丁寧に埋め その上を ふみかためるように踊り 去る

音楽とステージアクト変化

素面巫女ツスキル 声をあげて泣きながら 埋められた場所を訪ね踊り 祈り 呪文

音楽とステージアクト変化

埋められた場所からいつせいに植物がはえ育ち とりどりの大輪の花を咲かせる

単唱者(バス)の歌

「死から

芽吹く」

単唱者(ソプラノ)の歌

「いのち」

単唱者(バス)の歌

「死の

固い殻を

つきやぶって」

単唱者(ソプラノ)の歌

「花は

咲きほこる

いのちの

花は

咲きほこる」

群唱団(バスとソプラノの二重唱)の歌

「おのれを
すてたものの

死の

かけらから

いのちの

花が

よみがえる」

素面巫女ツスクルの踊り

仮面巫女群とともに 花々を摘み集めて踊り

花のすべてを闇に投げると

闇から青い月がのぼる

音楽 月を美しく賛える

青白いステージアート

単唱者（バス）の歌

「月が

のぼる」

単唱者（ソプラノ）の歌

「おのれを

犠牲にしたものの

愛が」

単唱者（バス）の歌

「天に

のぼる」

単唱者（ソプラノ）の歌

「プラチナの

光を

はなつて」

群唱団（バスとソプラノの二重唱）の歌

「天に

のぼり

永遠の

顔に

なる」

月が 地上に ゆっくりと降りてきて

土面の女シーの体の中に入っていく

縄文の音楽

縄文のステージアート

土面の女シー

「（地上をころげまわって苦しみもがき）ああ 夢からさめるとま

た 産みの苦しみが襲ってくる あああああ 体の中で 月がふく

らんでいく ああああああ 木の枝が 裂ける からだが裂け

る」

土面の男ムー

「（土面の女シーの背をさすりながら）ああ 妻のシーがみごもった

とわかって すぐ 木幣をたて ヒエの実をかもした酒をそなえて

おなかの子と 妊婦のシーがすこやかなれ と 心こめて祈つ

た 火のおばあさん神よ お産の神よ 戸口の神よ 戸の外の祭壇

のまわりの四人の神よ シーのおなががだんだん半月のようにふく

らみだしたときにも わたしの禪をシーの腹帯としておなかにしめ

てやつて さらに手厚く祈った 火のおばあさん神よ お産の神よ

戸口の神よ 戸の外の祭壇のまわりの四人の神よ

シーのおながが満月のようになったときには ヨモギの葉でシー

の体をはらい清めるまえに さらにさらに身を低くして祈った 火

のおばあさん神よ 家の守り神よ お産の神よ 戸の外の祭壇の四

人の神よ 戸口の神 庭の神 便所の神よ

あれほど祈ってお願ひしたのに あああああ（泣いて）どうして お

産間際の妻をかくもむごたらしく苦しめるのか」

川の神ママチ

「(立ちこめる煙りの中から現れ　ファルセットで)オオオオオオオオオ
オオー　だが　ムーよ　おまえは　わたしに祈らなかったではない
か　おまえと　おまえの妻シーと　やがてうまれてくる赤ん坊のた
めに　清らかな水と　いきのいい魚と　よく肥えた鳥やけものと
みずみずしい草や木を　いつも惜しまず提供している　ママチ川に
祈らなかったではないか」

土面の男ムー

「(川の神ママチの方にむかって手をさしのべ)戸の外の祭壇のまわ
りの　大幣の神　森の立樹の神　狩りの神といっしょに　水の神と
して　うやうやしく拝み　祈ったではありませんか」

川の神ママチ

「わたしを　ちいさな湧き水の神や　古い沼の神といっしょくたに
して　言葉の節約をはかったというのか」

土面の男ムー

「(烈しく首をふり)いえいえいえいえ　水の神の中でも　いちばん
大切な神として拝んだのです」

川の神ママチ

「では　なぜ　わたしの名をとえぬ」

土面の男ムー

「(うなだれ)　心の中で　ママチ川の神よと　となえていたのです」

川の神ママチ

「いいつくろうものは　そのむくいをうけるであろう(去ろうとす
る)」

土面の男ムー

「(追いつがって　絶叫し)川の神ママチよ　ご機嫌を直してくださ
い　なんの科トガもない　妻シーと　生まれてくる赤ん坊に　わざわい
を及ぼさないでください」

川の神ママチ

「それは　わたしの決める問題だ」
土面の男ムー

「(地にひれ伏してこん願し)お願いです　どんなものでも　供え物
としてささげます　願いをきいて下さい」

川の神ママチ

「(向き直って)　どんなものでもか」

土面の男ムー

「はい」

川の神ママチ

「誓うか」

土面の男ムー

「誓います」

川の神ママチ

「では　おまえの妻シーと　うまれてくる赤ん坊の　どちらかのい
のちを　供えものとして　わたしにささげるのだ」

土面の男ムー

「(とりすがろうとして絶叫し)　待つて下さい　川の神ママチ」

川の神ママチ

「(ファルセットで)オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
消える)」

土面の男ムー

立ちつくし　顔をゆがめ　やがて　泣きはじめ　号泣
し　泣き叫ぶ　泣き叫ぶ声エコーとなり　沈黙
地の底から　土面の女シーの呻き声　しだいに高まる

土面の女シー

「ハッ　ハッ　ハッ　苦しい　苦しい　苦しい　空が裂ける　わた
しが裂ける　月がはじける」

土面の男ムー

「(シーの背をさすり)いとしい妻よ　おまえの　立木よりも　岩よ

「蛇よ
単唱者（ソプラノ）の歌

「蛇よ」

「(なおも背をさすろうとして) ゆるしておくれ
いとしいシー」

まつしろいアオダイシヨ一の神よ
しめて
しめ殺して
死の神の首を
しめ殺して」

「(はらいのけ) 苦しみのあまり わたしの命が燃えつきたら ムー
赤ん坊をしっかり育ててね ああああ 昼が裂ける 夜が裂ける
わたしが裂ける 月がはじける」

素面巫女ツスクル

「(白蛇をふりまわし 狂舞しつつ ファルセットを連発し)ヒエー」

ツ
ヒエーツ
」

単唱者（ソプラノ）の歌

「(立ちすくみ 絶叫し) シー」

「（絶叫）あっちに行つて みえないところに行つて あああああ
風が裂ける 雲が裂ける わたしが裂ける あああああ」

「草よ

まみどりのヨモギグサの葉っぱよ

追つて

追いはらって

死の神の影を

追いはらって」

突然
沈默

土面の女シ—

「絹の布で鉢巻きをし 首に白い蛇を巻いて 踊りながらあらわれ」ヒエーツ（ファルセットを連発する）」

「(退りぞきつつ)川のママチよ わたしの命を 供えものとして捧げますから どうか 妻のシーも うまれてくる赤ん坊も 助けてやってください (闇に倒れこむ)」

「(絶叫) アアアアアアアーツ (倒れ) 長く悶え だんだんし

ずまり　やがて死ぬ」

沈默

聞

仮面巫女群
 ヨモギの葉をうちふりながら
 踊り出
 素面巫女ツスク

ルに従つて天井から下がつてくる産綱にすがつて座り苦しむ土面の

女シーのまわりを旋舞する

呪術の音楽
太鼓

呪術的なステージアート

遠くから 赤ん坊の声（エコー）

地平線に萌えそめる曙光

赤ん坊の声　　ますます高まる（エコー）

土面の男ムー 赤ん坊を高くかかげて立ちすくみ 泣く

単唱者（バス）の歌

「母親の

死から

あたらしい

いのちが

芽ぶく」

単唱者（ソプラノ）の歌

「苦しみ

死んでいった

母親の

むくろから

うつくしい

いのちの

よろこびが

咲く」

群唱団（バスのソプラノの二重唱）の歌

「みどりごよ

いのちの

曙

母の死の

悲しみからうまれでた

薔薇いろの

夜明け」

音楽 高潮

薔薇いろの曙光 空いっぱいにもえひろがり 赤ん坊をかかげて立つ

土面の男ムーのシルエットを焚く

ゆるやかに闇 沈黙

稲妻

雷鳴

雨ふりはじめる

風つよまる

荒れ狂う嵐

やがて 沈黙

水の滴のしたたり落ちる音 虚空にエコー

かすかな瀬々らぎ

川の流れ しだいにつよまる

光 青白くさしのぼる

はげしい川の流れの音

突然 沈黙

素面の女マ

「あるとき あの赤ん坊がいなかったら いまのわたしは いなか

ったのね」

川の流れ 高まる

素面の女マ

「ママチ川さん あなた それを ずっとみていてくれたのね 何

千年も前から ここで この場所で この森と この草むらと こ

の空の下で ずっと わたしの いのちの流れを みていてくれた

のね

うむわ わたし うんでみるわ

わたしの赤ちゃんの そのまた赤ちゃんの かずしれない かわ

いい赤ちゃんを わたし うんでみるわ」

いつしか

縄文の音楽

縄文のステージアート

たちこめる煙

川の神ママチ

「（ファルセットで）オオオオオオオオオオ」

音楽高揚

ステージアート高揚

突然 沈黙

逆光に凍る川の神ママチ

幕

(札幌大学教養部教授)